

たばこ耕作労働に関する一考察

坂 本 国 繼*

SAKAMOTO, K. Structure of Labour for Tobacco Cropping

1. 研究の目的 たばこ耕作が集約的労働の投下を必要とする点で、経営経済的には特殊な性格がある。本稿では、純畑作地帯のたばこ耕作農家について、経営内部的関連を、主として労働と所得の面から考察した。研究対象は熊本県菊池郡合志村の簿記々帳農家5戸を選び、その集計結果の分析を行った。

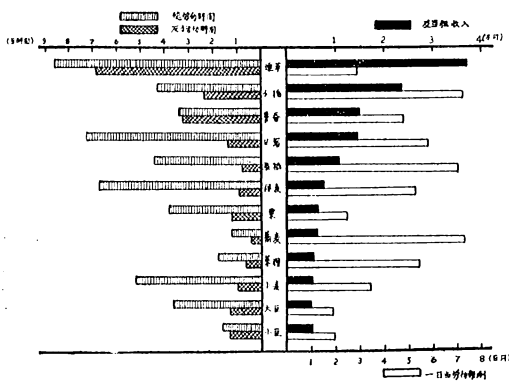
2. 概況 本村は熊本県の中央、阿蘇火山灰土の洪積合地にあつて、全耕地面積1,560町歩の約90%が畑地で、たばこは畑地の約10%にあたる115町に栽培され、専業農家の63%が耕作している。1戸当り作付面積は2反5畝で、耕種所得中に占める現金収入の割合は15~25%を示しもつとも高い。一般に1~3町層の農家が多く、極度に多毛的で、土地の利用度は高いが生産力は低い。

3. たばこ作労働の内容 たばこ作労働配分の関係を耕種部門別、作業別、家族別の3側面から農家5戸の平均について考察する。まず耕種部門の労働投下量は年間農業総労働の70%以上を占め、主として主穀作経営が行われている。この中でどの農家もたばこに

最も多くの労力を投下しており、反当に換算して72日を要していることになるが、これは一番労力を要しない蕎麦の14倍、麦の8倍、水稻の5倍である。しかし、作付の主体は麦、甘藷、陸稲であり、比較的多労なこれらの作業がたばこ労働の最長期である7~8月に相前後して集中する為、この期間がもつとも労働のピークが高くなっている。反当労働日数の72日は、県平均の109日に比しむしろ少ないが、本村の場合労働投下の面でたばこと競合する作物が多いことに基因すると考えられる。

つぎに作業別及び家族別の労働配分であるが、作業別労働の内容では、苗床管理に全労力の約10%、本圃の管理作業が30%、収穫乾燥に40%、調整に18%が投下され、収穫、乾燥、調整等、むしろ加工過程における労働がもつとも大きいことを示している。たばこ耕作には専ら家族労働力が動員され、質的作業に応じて人員別の労働が分担されている。しかも、通常農作業に従事しない老人、子供がたばこ耕作に大きな役割を演じていることは注意されなければならない。試みに本村の代表的農家1戸の耕種部門別労働時間と報酬の関係を図で見れば、労働の多要にもかかわらず、労働1単位当りの報酬が他作物に比し、著しく低いことが看取される。

にも拘らず、なおこれらの農家においてたばこ耕作が続けられるのは、単に反当収益が清いためばかりではなく、たばこ作労働が乾燥、調整など相当の経験と熟練を要する部分を含み、これは、力仕事に耐え得ない老人が家屋内で従事するに好適のものであつて、しかも、これらの労働が所要労働時間の主要な部分を占めることから、ここで、自家労力を完全燃焼に近づかしめ、農家経済全体としての労働報酬を有利に高めようとしているものと考えられる。



*九州農業試験場